

ラインの向こう側

～ 留置所体験記 その4 ～

茶ーリトル(ペンネーム)

前回のあらすじ

友達2人と服を盗み逮捕された。僕は20歳で、あとは未成年。僕だけ違う場所に連れて行かれ、留置所生活が始まった。

留置生活1日目に少し広めの檻を移動し、セカンドステージへ。そこには、第1印象、「すっごくおっかない」ゆうじさんを含め3人が既に入っていた。ゆうじさんにビビりつつ挨拶。返ってきた言葉は「おう、よろしくな」。その時、僕の中ではゆうじさんはもう「怖い人」ではなかった。

セカンドステージのメンバー：

僕、ゆうじさん、連さん、にんにんさん。

僕を含め、搬送されるメンバーは、手錠にひもを通して繋がれた。「さあ手錠にひもが通されました！ いよいよ出発の時であります！ まさに合縁奇縁！ 口では言い表せない、この不思議な一体感をご覧ください！ 罪人チーム、出陣であります！」・・・なんて古館さんが実況していればなあ。気持ちも和らぐのに。

「ノンノン、そうはいかないのが世の常さ。」と言わんばかりに、看守の人が大きな声で「搬送～！ 4名～！」って。また足がガクガク震えちゃったよ。あきはらというと、幾分僕より落ち着いている様に見えた。さすがはあきはら！ 経験者だけの事はある。

搬送用のちょっぴり長いワゴンバスに乗っけられ、警察署を出発。東京地検に向かう間、他の警察署にもいくつか寄るんだ。で、僕らと同じ様にひもで繋がれた罪人チームの方々が続々と乗せられてくる。総勢20人？ ぐらいはいたかな？

エントランス一番乗りが僕らの警察署チームだった訳さ。色んな人がいたよ。外人さんもいたし、おじいちゃんもいた。それに、なんか妙な空気が漂ってた。当然ながら、今まで味わった事のない感じだ。重くのしかかるって感じとは違うんだ。冷たくも温かくもない。まるで温度がないんだよ。

ただ、窓からついこの間まで僕が暮らしていた「向こう側の世界」が相変わらずご機嫌に息をしているのが見えて、泣きそうになった。甲州街道をビュンビュン走る車。道を歩く人達。携帯で電話をしている人。新宿らへんの高層ビル。そしてその上に広がる空。その全てが、まるでガラス越しに見る映画みたいだった。シュールな世界だった。ああそうか、そういう事か。今、僕の日常はこのワゴンバスの中。目を閉じてもごまかせないんだよね。手錠をはめた、ワッカをはめた僕が不自由で、「向こう側」が自由？ 違うんだよな～。琥珀な懐かしさを感じさせる「向こう側ムービー」を眺めながら、ワゴンバスは東京地検へ入って行った。

つづく・・・